

## 自分史分析の一考察 (Ⅳ) —生活史分析を用いた援助—

杉原 俊二

### A study of Life History Analysis (4) : Life History and Life Story

Syunji SUGIHARA

#### 要 旨

筆者はクライアントの自分史を分析することで、援助する方法の検討を進めている。そして、最近では、クライアントが自分の歴史を自分自身で語り、それを筆者がまとめ、クライアントと一緒に分析するという自分史分析の方法を進めている。本論文では自分史分析の1つのケースを取り上げて分析をした。このケースでは、自分史分析をおこなうと、自分の過去を「物語」として整理ができた。そして、クライアントはその後自分の生き方を変えている。自分史分析はスーパービジョンの技法として有効であることが確認できた。

#### Abstract

The author studies of the method by analyzing history of own of person. Client tells your history by yourself, and the author gathers it up. And the author analyzes it with client together. Author took up one case of Life history analysis in this thesis and analyzed it. There was rearranging as “a story” by the past of oneself when Author and client did Life history analysis. And client changes a way of live of oneself in the sequel. The Life History Analysis was able to identify that author was effective as technique of a supervision.

**Key words** : Life History Analysis, Analysis of half life, Self analysis, Narrative Practice

キーワード：自分史分析、半生分析、自己分析、ナラティブプラクティス

#### I. はじめに (問題と目的)

防止のための研究を進めているうちに、スーパービジョンの重要性に気づき、そのうちのセルフケアの技法として進めるためであった (杉原：2005a～d、2006a)。

#### (1) 発 端

自分史分析を始めたのは、援助職のバーンアウト

最初は、自分で自分史を文章化し、それを自分で分析する(考察を書く)という作業をしていた。次に「セルフ・カウンセリング」(渡辺:1990、1996)の方法を用いた「エピソード分析」(一つのエピソードについて自分で分析をする)と「テーマ分析」(自分のお世話になった人たち、母親としての躰、といったテーマに従って自分史を書く方法)に分け、さらに自分の人生を出来るだけ詳しく書き出し、それを分析する生活史分析(半生分析)をはじめた。

生活史分析は元々、自分史分析のモデルケースとして始めたが、複数のケースをおこなっていると治療として利用できることがわかった(杉原:2006a)。現在は、鬱症状を呈したクライアントの回復期に生活史分析をおこなっている。

今回取り上げる G さんは2度にわたって、比較的長期間の鬱的な症状を呈していた。ただ、G さんは資格を持つ援助者でもあるので、自分でゆっくりと時間をかけて養生をしている。筆者は、G さんのインタビューを始めた時点では、鬱的な症状を呈していたことを知らなかった。そのうち、自分の口からそのときのことを語り始めた(注1)。

前著(杉原:2006a)と同じく一人の自分史を8回にわたり報告書(研究ノート)という形で報告した(杉原:2005e~h, 2006b~e)。前著で対象となった F さんについては、人生の変化が多いため興味深く、記述したエピソードが多くあった。G さんについては、大学院時代から知っている人でもあったが、心情について切々と語られたこともあり、書きたいことが多くなった。

本論文も、その8回の報告をベースに全体を振り返りたい。

(注1) G さんという呼び名は「自分史分析の一考察(I)」(2005b)からの連続であり、イニシャルではなく、「一考察」で取り上げる7人目の事例という意味である。なお、事例を取り扱っている「自

分史分析の研究」では一人称で、「一考察」では三人称で表記している。

## (2) G さんの経歴

G さんはソーシャルワーカーとカウンセラーをしている。学歴としては私立 A 大学の教育学科(小学校教員養成課程)を卒業後、国立 B 大学大学院修士課程へ入学し、24歳で修士号を取得している。翌年の8月に臨床心理士、修士修了から5年後に社会福祉士の資格を取得。39歳の時に母校の A 大学で博士号を取得し、現在に至っている。

教育歴としては、大学卒業後、看護学校(病院附属の准看護師養成校)の非常勤講師をはじめた(2年間)。翌年、短期大学の非常勤講師を始め、修士課程終了後、専任講師となった。助教授を経て、31歳の若さで教授となっている。現在は、その短大を改組した大学の教授(短大教授も併任)である。

臨床歴としては、大学4年生の時から3年間、総合病院で常勤職員をした。続いて、就任した短大のそばにある精神科病院で3年間、非常勤職員をしている。その後は、中学・高校生と短大生の学生相談をしていた。34歳の時に社会福祉施設の施設長となり、2年間務め、その後は現在まで理事長としての職務をおこなっている。

G さんは、すでに事例研究で自分の臨床体験を振り返り、また、クリスチャンとして信仰歴についての振り返りをしているが、今回のような全体を振り返る作業は始めてであったそう。

G さんの経歴を簡単にまとめると以下のような

1963年6月 近畿地方の F 町で生まれる。

1968年4月 私立幼稚園入園

1970年4月 町立小学校入学

1976年4月 町立中学校入学

1979年4月 県立高等学校入学

1982年4月 私立A大学教育学科入学  
 1985年3月 X病院での勤務を開始  
 1986年4月 国立B大学大学院修士課程入学  
 1987年4月 私立C短期大学非常勤講師  
 1988年3月 B大学大学院修士課程修了、X病院退職  
 4月 C短期大学専任講師、Y病院非常勤相談員  
 1989年8月 臨床心理士資格取得  
 1991年3月 Y病院非常勤職員退職  
 4月 C短期大学助教授、学生相談室カウンセラー  
 社会福祉士養成施設（通信制）入学  
 1992年10月 社会福祉士養成施設卒業  
 1993年3月 社会福祉士資格取得  
 1995年4月 C短期大学教授、学生部次長（兼学生課長）  
 A大学大学院博士課程入学  
 1998年3月 A大学博士課程満期退学  
 4月 社会福祉施設、施設長・法人理事就任  
 2000年4月 社会福祉施設理事長就任  
 C大学設立、教授  
 2003年3月 博士（教育学）取得

## Ⅱ. 事例（自分史）

### 1. 誕生から高校卒業まで

#### (1) Gさんの誕生

Gさんは1963年に近畿地方にある小さな町で生まれた。4歳年上の兄と4歳年下の妹の3人きょうだいである。当時、父親は会社を経営しており、母親は専業主婦であった。

父親は小学校を卒業後、大阪や神戸で働きながら、夜学で学んでいた。母との結婚を機に独立して、大阪に自動車を扱う商社を設立した（1999年に解散）。母親は向学心の強い家庭で育ち、兄や姉が

1旧制の帝国大学や高等師範学校を卒業していた。しかし、母親の父が早く亡くなったため、母親は新制高校を卒業するのが精一杯であった。そのためか、子どもに対しては教育熱心であり、そのことが子どもたち（特に兄）に強い影響を与えてしまった。

Gさんの兄は、当時としては珍しい早期教育の学校へ幼稚園入園以前から通っており、音楽の勉強をしていた。しかし、Gさんも同じルートを歩む予定であったが、Gさん本人には全く肌が合わず、「お試し期間」の時に入園を拒否された。そのため、兄とは違い、家から最も近い私立の幼稚園に入学した。

さらに兄は、隣の市にある市立小学校、中学校に越境入学したが、Gさんは在住する町の町立小学校へ入学し町立中学校へ進学した。

#### (2) 小学校・中学校時代

小学校では、スポーツが得意でクラスでも中心人物であった。勉強の方はトップクラスではなかったそうであるが、宿題を忘れたことが6年間で全く無く、しっかりとした子どもだと思われていたそうである。

4年生になるとスポーツ少年団に入り、陸上や水泳、サッカーやソフトボール、バレーボールやポートボールをおこなっていた。陸上や水泳では郡内の大会にも出場し、バレーボールでは県の大会にも出場していた。

中学に入ると優秀な指導者がおり、その地区で強豪であったバスケットボール部に入部した。先輩たちも強かったので、1年生の時には公式戦に出られなかったが、2年になると試合に出られるようになり、2年生の新人戦からはスタメンで出場することも多かった。人望も厚く、キャプテンにもなっていた。2年生と3年生では県大会にも出場しており、3年生の時には県でベスト4に入った。

勉強は、家の近所にあった塾へ週2日通っていたが、それだけで十分、上位の成績を取っていた。

### (3) 高校時代

Gさんの県では、当時は私立よりも公立高校のレベルが高く、特に県内に数校あった旧制中学からの歴史を持つ学校のレベルが高かった。そして、県庁所在地にあり、旧制中学からの伝統をもつ高校が最もハイレベルであった。Gさんの兄はその高校に通っていたが、Gさんの成績ではその高校は難しかった。そのため、その次のレベルにあるとされている、隣の市にある県立高校へ進学した。

高校でも、バスケットボール部に入部した。旧制中学からの伝統はあるものの、入試が難しいため、それまではあまり有力な選手は入部してこなかったのがあったが、Gさんたちと1学年上に県の有力選手が入部していた。

Gさんの入部前の予想に反して激しいレギュラー争いがあり、ベンチ入りはおろか遠征にも連れて行ってもらえない時もあった。それでも腐らずに練習を続け、1年の終わりごろから試合に出場するようになり、2年の秋からキャプテンになった。2年の県大会で優勝、3年では県大会ベスト4に入り、2年連続近畿大会に出場している。ただし、全国大会には残念ながら一度も出場はできなかった。

クラブ活動に熱心であったため、成績は急降下をしてしまい、中位よりも下の成績であった。それでも3年の夏にクラブを引退してから成績は徐々に上昇していた。

## 2. 大学時代

### (1) 大学入学

#### 1) 入学試験

Gさんは、地元の国立大学教育学部、早稲田大学教育学部、青山学院大学文学部教育学科とA大学教育学科を受験した。早稲田以外は小学校教員養成

課程であった。国立大学が第一志望であり、青学は合格圏内、早稲田大学は友人が受験するので、一緒に行くという「記念受験」であった。模擬試験の結果から、A大学はあくまでも滑り止めであり、試験の日程の関係で受験校に加えたのであった。受験日は、共通一次、A大学、青学、早稲田、国立大学（二次）の順であった。

蓋を開けてみると、青学のレベルは予想外に高く、受かったのはA大学だけであった。国立大学の発表が3月中旬であったので、その時点までA大学へ通学するためのアパートも決まっていなかった。母親と二人で、アパートを探しに学生部へ行った時、学校のすぐ裏にあるアパートがキャンセルになり、そこに入室できることになった。キャンセルになった理由は、入学予定の学生が青学の二部に補欠合格し、そちらへ行くことになったからであった。

### 2) 不本意入学

Gさんにとっては、A大学への入学は不本意入学であったのだろう。1年から2年生にかけては、学業に関しては決して意欲的ではなかった。自分の住んでいる部屋の入居予定者は自分が行きたかった大学の二部に喜んで行った、ということは、A大学はそれ以下の大学なのか、といったことを繰り返し考えていた。

Gさんのそのモヤモヤとした気持ちは、青学二部の三年次編入学試験を2年の終わりに受験をして不合格になるまで、吹っ切れることは無かった。

### 3) 男子バスケット部の創部

新入生の歓迎会で同じ学科に、Gさんと同じ県の工業高校でバスケット部の主将だった人が一浪をして同級生として入学していた。「ジョニー」というニックネームのJさんは、男子バスケット部を作ろうとGさんに持ちかけてきたのであった。A大学の女子バ

スケ部は歴史があり、その地域では一部リーグに属する強豪であった。しかし、男子学生が少なかったため、男子の部は開学以来存在していなかった。

部員が足りず、練習場所もなかなか確保できない中で、いろいろと協力してくれる人が多くあり、1年目から大学のリーグに参加し、近隣の弱小クラブと対戦した。バスケットをするのは体育の授業以外では初めて、という部員を抱えながらも高校の時に近畿大会へ出場した2人を中心にどんどん勝ち進んだ。2年目は全勝優勝したため自動的に上の部へ昇格し、3年目もそのリーグで2位になり、入替戦でも勝ったために、もう一つ上の部に昇格した。

Jさんは2年の終わりに、交際していた女性が妊娠したため、彼女と結婚をした。そして大学を退学する決心をした。Gさんたちは、大学でお世話になったA大学ドイツ語の非常勤講師でもある塾の経営者に頼み込み、Jさんを学習塾の講師として雇ってもらい、何とか大学を去らないでもよいようにした。ただ、Jさんはそれ以来クラブの練習に参加できず、試合にも出られなくなった。

Gさんは結局3年のシーズン終了まで主力選手として活躍し、Jさんから引き継いだ「4番」(キャプテン番号)をつけていた。

## (2) ゼミ

### 1) ゼミの選択

Gさんが言う「青学二部(編入学)の記念受験」の準備と平行して、ゼミの選択がおこなわれた。教育学科は小さな総合大学といわれるくらい、様々な分野のゼミがあった。当時は教科教育(国語・算数・理科・社会・図工・体育・音楽・家庭)の8教科に加え、教育科学(教育学、教育心理学)の研究室があった。さらに、学科の許可が得られれば、他学科の教員に指導を受けることが出来た。

Gさんはクラブの関係で体育研究室に入るか、教育心理学研究室に入るか迷っていた。体育研究室は

教育学科の専任教員の他に、一般教育課程担当の2人の専任教員がいて、希望する教員のゼミで指導を受けることができた。教育心理学研究室は、当時の学科主任である教授と40歳代半ばで教授になったばかりのT先生、さらに教職課程担当である講師の3人がいた。

Gさんは同じ学科で女子バスケット部の先輩たちの意見も聞き、女子バスケット部監督でもある体育研究室の助教授に断りを入れ、教育心理学研究室のT先生のゼミに入った。

### 2) Tゼミ

T先生は、有名私立大学の心理学科へ系列中学からエスカレーターで入学した。修士課程を修了後、その大学で助手をしていたが、奨学金を得ることができたのでアメリカの大学へ留学した。5年間で博士号を取得した後、そのままアメリカの公立相談機関で働いていた。30歳代半ばでA大学からの招聘を受け、帰国して講師になった。翌年、助教授になり、10年ほどで教授へと昇任している。それが、Gさんが入学した翌年のことであった。T先生が帰国した直後に修士課程ができたのであるが、T先生は修士課程開設以来の中心的な教員として活躍していた。

Tゼミは、他ゼミと違って学部3年から修士課程2年までの4学年が同時に集まる「総合ゼミ」と各学年で集まる「学年ゼミ」があり、Tゼミ出身で修士号を持つ学科助手が中心になって運営されているため、同じ学科の他のゼミとは雰囲気が全く違っていた。

GさんはT先生やゼミの上級生に可愛がられた。そして、様々な便宜を図ってもらえた。

### 3) 病院見学

Gさんはその頃、将来の仕事をどうするのか迷っていた。

教育学科とはいえ、全員が小学校教諭になれるわけではなかった。Gさんの学年も、就職した人は、小学校や中学校（注1）へ就職した人と、塾や家庭教師、スイミングスクールのインストラクターといった教育関係の職に就く人と、その他の一般企業に就職する人がだいたい3分の1ずつであった。大学院へ進学した人は3名いたが、他大学へ進学したのはGさんだけであった。

（注1：他学科の開講科目を履修することで、国語科や社会科については中学校・高等学校の免許状が取れた）

Gさんは教員免許状については小学校ではなく、中学校・高等学校の社会科の科目を履修していた。しかし、当時からカウンセリングに興味があり、そのような職場への見学を希望していた。とりあえず3年生の後期から、Tゼミの卒業生が就職している公的機関や福祉施設、作業所などへ見学に行っていた。病院に関しては、先輩たちがあまり就職していないこともあり、学科助手のMN先生が有名私立大学の社会福祉学科を卒業した従姉が就職している病院を紹介してくれた。

その病院はA大学から遠く離れており、（実家の方が近いこともあり）冬休みに見学と実習をさせてもらった。

#### 4）在学中の病院への就職

Gさんが3年の冬休みに実習をさせてもらったX病院は、田舎にある総合病院であった。事務部の中に「医療相談室」（医療相談課）があり、総合案内と医療ソーシャルワーク室と臨床心理室が一緒になったような部署であった。相談室の窓口にはできれば、誰か一人でもいた方がよかった。X病院では3人の常勤職員で回っていたが、席空きの時間も多くなり、臨時職員でいいから人を探していた。室長（課長）のTSさんは実習の終わりごろに、Gさんに対して「4年生になったら（実習を兼ねて）アル

バイトに来ませんか」と誘った。

Gさんは早速、大学に戻るとT先生に相談をした。T先生は、週1回あるゼミに参加できるのであればいいのではないかと賛成をしてくれた。ただ、卒業論文を最低限でも3年生の3月末までに仕上げるのが条件になった。幸い、4年生の卒業論文の手伝いをしており、3人の先輩たちとの共同で取ったデータがあるので、それを使って論文を書くことは可能であった。

とりあえず、卒業論文を2月上旬の後期試験終了後から書き始め、3月上旬に最低限の枚数である400字詰め原稿用紙30枚分の原稿を書き上げ、T先生に見せた。T先生から指摘を受けた部分を最小限修正して、3月中旬に提出した。X病院はA大学から通える範囲にないため、病院の独身者用職員宿舎へ3月下旬に引越しをした。

### 3．大学院とX病院

#### (1) X病院での仕事

X病院での仕事は、主に室長のTSさんの手伝いであった。午前中は、3人のスタッフはそれぞれ割り振られた仕事に出て相談室にいないため、窓口において案内と取次ぎをした。午後からは、ソーシャルワーカーでもあるTSさんの手伝いのほか、心理判定員を兼ねているRNさん（学科助手のMN先生の従姉）の資料整理も手伝っていた。

GさんがX病院で働いている間に、RNさんの妊娠が明らかになった。翌年の4月から産休に入り、そのまま1年間の育児休暇を取るようになったので、Gさんは2年目もX病院にそのまま残って就職（契約職員として）することになった。

ところが、Gさんとしては、当時、まだ資格化がなされていなかった臨床心理士になりたいという希望があり、そのためには修士課程を修了したい、と考えていた（注2）。GさんはX病院から通える範囲にある大学院を探した。複数の大学院を受験した

が、結局、その中からX病院へ最も近い国立大学であるB大学の大学院のみ合格した。

(注2：経過措置もあり、大学(学部)を出て、経験年数さえつめば資格を取得することは可能であった)

## (2) 大学院との両立

B大学は郊外にあり、X病院からは高速道路を使用するとラッシュ時でも30分で通うことができた。大学には個室の学生宿舎があり、Gさんはそれまで住んでいたX病院の職員宿舎(3LDKのマンションに看護師・放射線技師と一緒に住んでいた)から引っ越した。

B大学で指導教官になってくれたN教授は、Gさんとは面接試験まで全く面識がなかった。個性は強いが親切的な先生であった。B大学では他大学の大学院と違い、授業がきちんとおこなわれており、出席をしなければ修了ができないことがわかった。

X病院では正職員に準じた契約職員になったので、週44時間働く必要があった。N教授に頼んで時間割を入学前に入手し、履修計画を練った。必修科目の4科目は水曜日午後(2コマ)と土曜日午前(2コマ)に履修することができた。しかし、集中講義を利用しても、そのままでは2年間で修了するための単位が不足した。そこで、N教授と相談し、3人の助教授の授業(単位)を借りて、実務経験を報告することで授業に振り替えてもらえるように配慮をしてもらった。最終的には、2年生の2月におこなわれる予定の集中講義を履修することで修了ができるという、ぎりぎりの履修計画ができた。

結局1年目は月火木金に10時間(朝8時～夕6時)ずつと、水曜日(8時～12時)に4時間で計44時間の勤務を組んでもらった。

## (3) X病院での2年目以降

2年目からは正職員となったのであるが、Gさん

は心理テストの知識と実務力が不足していたため、RNさんの仕事をそのまま引き継ぐことができなかった。そこで、心理判定の仕事のほとんどは、その年から非常勤職員で来てくれた元児童相談所勤務のKBさんが引き受けてくれた。Gさんは外回りの仕事とTSさんがやっていた病院附属の看護学校の講義を引き受けた(TSさんが母校である大学での非常勤講師を引き受けたため)。

とはいえ、やはり心理の仕事に興味あり、大学院で「投影法」の講義を受けながら、実務の中で覚えていった。また、家族も含めた面接をすることが多く、(ソーシャルワークとの共通性も多い)家族療法に関心を持ち始めていた。

3年目になると、X病院の関連施設の応援にも借り出されるようになった。RNさんが育児休暇明けで復帰した後は、以前にも増して多様な仕事に従事するようになった。経験を積めば積むほど「便利屋」的な存在になっていることに、多少の不満があった。

## (4) 短期大学非常勤講師

大学院1年の3月下旬に、A大学のT先生が交通事故に遭い長期の入院をすることになった。そして、大学院の授業やゼミには6月から復帰が可能であるが、講義に関しては、前期は無理であろうと判断された。A大学での講義は2年生の教育心理学だけであったので若手の教員が引き受けた。しかし、C短大の非常勤講師については、T先生の都合もあり土曜日の1・2限に時間割が組まれ、その時間に出講できる人がすぐに見つからなかった。

多少交通費がかかっても、と短大側が折れたため、Gさんに声がかかった。GさんはT先生のためならば、とすぐに引き受けた。B大学の学生宿舎からC短大までは、新幹線を使っても4時間はかかり、1限目の授業(9時開始)に間に合わせるためには、前日から宿泊する必要があった。

諸事情から、Gさんは後期も引き受けることになり、前後期（と定期試験）をあわせて、28回出講した。

#### (5) 大学院の修了

大学院も2年になると、1年目の頑張りが効いて、授業は水曜日の午後にあるゼミ（修了研究）と集中講義だけであった。ゼミでは修士論文の進捗状況を4人のゼミ生と一緒に発表をするのが主な内容であった。

Gさんは、元々はA大学で卒論のために考えていた内容を修士論文で使ったため、他の同級生よりはスタートが早く、データの整理は1年の秋と2年の春に発表した発表会のときにそれぞれが終わっていた。ただし、執筆はなかなか進んでおらず、夏休みの間に大急ぎで書き始め、11月の最終発表に何とか間に合わせた。

1月20日が最終締め切りであったが、前日に何とか提出をすることができた。1月末の口頭試問、2月上旬の修正再提出、2月中旬におこなわれた集中講義（2単位分）を終え、大学院の修了が決まった。

### 4. 転 機

#### (1) Y病院

修士論文の内容を発表する某学会が10月にA大学の近くで開催された。学会の間にC短大での授業があるが、その時間以外は金・土・日の3日間参加できた。

その時、A大学の隣県にあるY病院の話聞いた。Y病院は海外の病院をモデルに、旧式の病院を移転する際にリニューアルした先進的な精神病院であった。その病院には、総合相談部というセクションがあり、心理カウンセラーとソーシャルワーカーが組んで心理療法をおこなっていた。

GさんはA大学の臨床心理学の講師に頼んで、Y

病院の総合相談部部长であるYHさんを紹介してもらい、挨拶をした。GさんはX病院やC短大での仕事について話し、来年の3月にB大学修士課程を修了することも話した。YHさんはにこやかに、興味があるならば一度Y病院に見学に来ませんか、と誘ってくれた。

興味のあったGさんは翌週の土曜日に、C短大での講義を終えた後、Y病院に立ち寄った。X病院とは比較にならない設備で最先端の心理療法（家族療法を含む）をおこなっていた。Gさんの心は動いた。

#### (2) C短大専任講師

12月中旬になると、C短大の教務部長であるK教授から「来年度C短大で専任講師にならないか」という誘いを受けた。それは、T先生が学部長に就任することが決まり、非常勤講師を続けられないことと、一人の教員が他の短大へ行くために退職することが決まったからであった。K教授によると、T先生も了解済みであった。

GさんはY病院のことを知るまでは、博士課程への進学を考えていた。Gさんは、自分のレベルでは国立大学の博士課程は無理だが、私立大学で有名なところであれば可能であると考えていた。そして、自分の関心のある分野の有名教授が、国立大学を定年退官後、博士課程を持っている私立大学へ再就職するという情報があった。

Gさんは①X病院への残留、②Y病院への移籍、③C短大への就職、④私立大学博士課程への進学の4つの選択肢があった。地理的には、X病院と私立大学博士課程が在来線と自動車で1時間半、Y病院とC短大が在来線に新幹線を使って1時間弱の距離であった。

#### (3) C短大とY病院へ

C短大に行くのであれば、X病院は退職しなけれ



ばならなかった。契約職員とはいえ1月上旬には退職の意思を伝える必要があった。

C短大は月曜日から土曜日が勤務日であるが、週に1日、研修日を取ることが出来た。そして、その研修日は半日ずつ2回に分けて取ることも出来た。そこで、Y病院では火・木・土の午後1時から9時の非常勤の勤務が可能か、を部長のYHさんにたずねた。YHさんは驚きながらもY病院の院長と掛け合ってくれた。そして、通常は修士課程修了のフレッシュマンは非常勤職員として採用しないのであるが、Gさんを例外的に経験者として採用してくれることになった。

GさんはC短大と最寄り駅の間にある新築賃貸マンションを借り、3月下旬に学生宿舎からそのマンションに引っ越した(X病院の勤務は3月31日まで)。

## 5. C短大講師

### (1) C短大とY病院での勤務

Gさんは、すでに短大で非常勤講師として1年間勤務していたため、教員と事務職員のほとんどと顔見知りであり、新規採用という感じではなかった。しかし、それでも細かいシステムはそれまで勤務していたX病院とは違っていたので、Gさんはいろいろと聞きながら1年目を過ごした。授業は、短大の科目が前期4コマ、後期6コマであり、それに、高等学校の衛生看護科専攻科の授業が前期に2コマあった。

Y病院は、学期の期間中は火・木・土の出勤であり、その日は最寄りの駅を12時少し前に出て、在来線と新幹線を使い、12時55分には病院のタイムカードを押していた。ケースの数もだんだんと増え、勤務日には他のスタッフのフォローも含めると1日に4ケース程度を担当するようになった。ケース以外では、木曜日の13時から全体ミーティングとケースカンファレンスが、火曜日の13時から新人ス

タッフのグループスーパービジョンがおこなわれ、その両方に出席していた。勤務の終了時間は一応21時であったが、学期の期間中は22時を回ることもしばしばおきた。

### (2) 変 化

C短大の方も2年目になると、授業のコマ数が通年で9コマになった。校務分掌も担当するようになり、仕事量は着実に増えていた。Y病院での勤務も紆余曲折はあったものの、おおむね順調であった。2年目の8月には臨床心理士の資格を取得した。

しかし、Y病院の勤務で2年目の後半から風向きが変わってきた。総合相談部は、業務については順調であったが、人件費が高く医療保険の枠の中でおこなうため収入が少ないので、赤字であった。それが病院の健全経営の点から問題となり、経営陣と総合相談部の幹部スタッフが話し合いをしていた。そして、総合相談部をリハビリテーション科の一部に改組して相談業務を縮小し、心理療法については、その大部分を病院外に設立する相談室に業務を移し、自由診療でおこなうことになった。

幹部スタッフの3名のうち、ソーシャルワーカーが責任者として残り、YHさんともう一人のスタッフは退職することになった。若手のほとんどは新しい部署に移るが、Gさんともう一人は非常勤職員なので、「残っても辞めてもかまわない」ということになった。

### (3) 助教授昇任とY病院の退職

GさんはY病院の非常勤職員を辞める決心を3年目の半ばにした。そして、Y病院の上司であるYHさんとC短大のK部長に伝えた。

その頃、C短大では介護福祉士養成の学科新設をする計画を立てており、Gさんも(本人の知らない間に)その基幹スタッフに名を連ねていた。そして、その講義担当を引き受けるかどうかのやり取り

の中で、助教授昇任の話が出た。

それまでのC短大の給与体系では、大学卒業7年目に助教授に相当する級である3級1号俸となるため、修士修了4年（大卒6年）目では1年早いことになってしまう。しかし、GさんがC短大のそばにある公立短大から講師（の候補の一人）としての誘いを受けていたこともあり、1年間は給与が講師のままで、という条件をつけてK部長がやや強引にGさんの助教授昇任の人事案を決めてしまった。

Y病院の最後の半年において、Gさんは担当していたケースをできるだけ終了させ、引き継ぐケースを最小限にするよう慎重におこなった。退職を決めてからは新規ケースの担当をやめ、担当ケースを徐々に減らし始めた。2月～3月では、（すでに終了し）フォローアップをするケースだけになっていたもので、出勤は土曜日のみとなった。

1月には昇任人事の書類を整えて提出し、2月の教授会での審議と常務会での承認がおこなわれ、4月から助教授になることが決まった。また、中学・高校を含めた学園全体の健康管理センター構想があり、その担当者としてその計画を推進することが決まった。

## 6. 助教授時代

### (1) 社会福祉士

介護福祉士養成課程の開設を1年後に控え、社会福祉援助技術を担当することになった。しかし、Gさんは、実践経験はあるものの社会福祉を専攻していたのではないので、理論などをほとんど知らなかった。そこで勉強もかねて、その年から始まる通信制の社会福祉士養成施設への入学を決めた。また、実習を兼ねて県の福祉事務所にある児童家庭相談室の家庭相談員になった。

助教授2年目の1月に社会福祉士の国家試験があり、3月末の発表では合格していた。勉強を通じ

て、理論の深い理解はできなかったが、社会福祉学の全体像を俯瞰することはできた。

### (2) 事例研究

助教授3年目と4年目は児童家庭相談室も辞めて、C短大と学園の仕事だけをおこなっていた。

ただし、助教授時代に何もしていないわけではない。むしろ、論文などの研究業績は多く、人一倍多く活動していた。Gさんによれば、過去の臨床活動（85年4月から91年3月までの病院臨床とその後の学生相談）についての事例をまとめていた。そして、毎月おこなわれていた医師や臨床心理士たちの勉強会で、3ヶ月に1回のペースで事例の提供を行い、それを会報に報告していたそうである。

事例研究ではなく、Gさんの認識としては事例報告に過ぎないのであるが、それが全て「論文」としてカウントされたため、あたかも派手な研究活動を続けていたように思われていた。

### (3) 教授昇任

助教授4年目の時、A大学のT先生から2年前に開設した博士課程に3期生として入学しないかという誘いを受けた。T先生は研究科主任であった。Gさんも学問的な指導を受けたいという願望があったので、受験することにした。

同じ頃、C短大で新しい人事の基準が作られていた。それ以前は基準が明確でなく、人事の不平等が見られたからであった。新基準に照らすと、3人の該当者があったが、そのうちの一人がGさんであった。Gさんは講師の3年目の時に、地区（A大学やC短大が所在する郡市）で始められた研究会に設立メンバーとして参加した。そこでの事例提供と、その後の事例報告をしていたので、研究業績がそれまでよりは増えた。

人事の基準は、在籍年数、研究業績（の数）、役職などの経験、取得資格、その他をポイント化するものであった。Gさんは算定した時点で教授の基準

を4ポイント（昇任の時点では8ポイント）越えていた。検討を進めていたK部長たちは他の理事と相談して、一定の期間の給与が助教授給でよいならば（実際には2年間）、教授への推薦をすると決め、Gさんに伝えた。Gさんはそれを了解した。

Gさんは書類を提出して審査を受け、教授となった。しかし、給与も助教授のままであり、個人研究費は講師と同額、研究室も以前と同じ健康管理センターの中であり、仕事内容もほぼ同じままであった。

## 7. 教授時代

GさんはC短大の教授になり、現在もその職にある。1年目にA大学博士課程へ入学、博士課程を満期退学した後、A大学非常勤講師となり、博士課程入学から8年後に博士号を取得している。現在は、A大学大学院修士課程でも非常勤講師として授業を担当している。

また、知的と身体障害者の福祉施設の施設長を2年間引き受け、現在はその職を常勤の職員に譲り、理事長となっている。

Gさんは大学3年生の時に洗礼を受けたクリスチャンであり、現在も教会へほぼ毎週日曜日に出席しているが、その教会で知り合ったA大学の後輩でもある女性と結婚したのは36歳の時であった。

## Ⅲ. 考 察

### 1. 3回のやりとり

本論文では、Gさんの生活史分析のうち、大学入学から教授就任までに焦点を当てて、事例を再構成した。Gさんの自分史分析をする時、インタビューをした上で3つのものを使いながら、自分史分析を進めた。

①インタビューをまとめたメモ（点メモで作成）。

これは、インタビューをメモし、それを見ながら確認をする。毎回のインタビューの終盤に行った。

②自分史の事例報告（論文形式にまとめたもの10編）。報告としてまとめたもの。電子メールの添付ファイルで送り、電子メールと電話でやり取りをした。

③生活史全体のまとめ（本論文の事例）、先述の事例報告の10編を資料としてまとめたもの。電子メールの添付ファイルで送り、主に電話でやり取りをした。

これらは、一連のインタビューの中から出てきたものである。①と②については、同一の流れにあるものであるので、大きな差はなかった。しかし、③については、再構成をしているせいか、新しい視点による解釈が可能になった。

一つは、①と②ではそれぞれのエピソードにまつわる細かな苦勞が述べられていた。しかし、③ではそれをばっさりと切り取ると、実にあっさりとした展開が見えてきた。それが、「10年周期による躁と鬱の繰り返し」である。

また、一つ一つの出来事が単純化されると、お世話になった方の名前が残った。それが「お世話になった人たちへの感謝」である。

### 2. 躁と鬱の時期

Gさんとの自分史の検討の中で、いくつかのことが明らかになった。一つは「過活動」と「低活動」の時期があったことである。

#### (1) 過活動期

Gさんは、1985年4月から大学4年に在学のままX病院の勤務を始めている。さらに、86年からは修士課程に入学し、病院の附属とはいえ看護学校の非常勤講師も始めている。87年からは、さらにC短

大非常勤講師も始めている。これが、Gさんのいう「X病院時代」である。

88年には修士課程を修了して、C短大とY病院に就職するために引越しをしている。89年8月には希望していた臨床心理士の資格を取得している。そして、91年にY病院を退職するまでの間を、Gさんは「講師時代」と呼んでいる。

91年4月にGさんはC短大の助教授に昇進すると同時に、通信制の社会福祉士養成施設に入学している。そして、93年3月には社会福祉士となっている。これを、Gさんは「助教授時代」の前半と呼んでいる。

この3つの時期（実質8年間）は、常に複数の仕事をこなし、それぞれでの成果を挙げている。しかし、Gさんによれば、講師時代の3年目には体調が悪く、Y病院の仕事も最終的には終わらせる仕事であったので続けられただけであり、助教授時代にはほとんど何もできない状態であったそうである。

## (2) 低活動期

95年4月にはGさんは教授へと昇任しているが、その約1年後までは短大の仕事以外は基本的におこなっていない。精神科での経験から投薬治療を受けることも考えたが、生活を調整することで対応してきた。

ただし、助教授時代に何もしていないわけではない。むしろ、論文などの研究業績は多く、人一倍多く活動しているようにも見える。しかし、Gさんによれば、過去の臨床活動（85年4月から91年3月までの病院臨床とその後の学生相談）についての事例をまとめていただけであるようだ。事例研究ではなく、事例報告に過ぎないのであるが、それが全て「論文」としてカウントされたため、あたかも研究活動を続けていたように思われ、さらには教授への昇任人事の時に、大きな力となったが、Gさんにとっては意外な感じがしていたようである。

## (3) 躁と鬱の繰り返し

ここでは、過活動の時期を軽い躁、低活動の時期を軽い鬱とする。約6年の躁の時期、約4年の鬱の時期があったことになる。その後教授になってからは再び、C短大以外の仕事も始め、母校であるA大学に卒業後開設された博士課程へ入学し、8年がかりで博士も取得している。博士課程の満期退学直後に、施設長を引き受けたが、体調不良もあり2年間で他のスタッフに引き継いでいる。この前後から鬱の兆候があった。現在（インタビュー時の2004年後半）は再び元気になっているが、いつ調子が悪くなるかもしれないので、少し控えめに生きているそうである。

かの有名な作家であるゲーテも、短期間の躁（約2年）と長期間の鬱（約7年）を繰り返していた（亀山：1962、村田：1987）。この場合は、作品の執筆を指標にしながらはっきりとしている。Gさんの場合は、はっきりとはしていないが、2ヶ所以上で仕事をしているか、1ヶ所で仕事をしているかという点で見ると6年の躁、4年の鬱ということがいえるかもしれない。

## 3. 他者からの援助

### (1) 運のよさ

Gさんと筆者のやり取りの中で、よく出てきた言葉が、「運がいい」であった。

実際、Gさんは就職や人事に関して自分から積極的に動いたことはほとんどなかった。X病院もY病院も興味を示した時に、先方から声をかけてくれている。C短大に関しても、T先生の交通事故ということから、先方から声をかけてくれ、非常勤講師から教授までなっている。博士号に関しても、T先生が、実際の指導教員であるEN先生の指導力を見極めたうえで、入学を薦めている。

## (2) 7人の恩師

Gさんは生活史を振り返りながら、多くのお世話になった人の名前を挙げていった。筆者がメモをしただけで30名を越えていた。

そして、7名の恩師の名前を挙げていった。本論文でも名前の挙がっていたA大学のT先生（教授）、B大学のN先生（現在、私立大学教授）、C短大のK部長（現在、C大学教授・C学園副理事長）、X病院のTSさん（現在、私立大学助教授）、Y病院のYHさん（アメリカの大学教授）そして、幼稚園の園長であったE先生（故人、牧師、元私立大学教授）と大学時代から通っていた教会の主任牧師であったHT先生（故人、元私立大学講師）であった。

Gさんも大学人であるので、恩師が全員大学教員であるというものもあるが、幼稚園の園長を挙げているのはなぜであろうか。

母親があまりにも教育熱心なため、Gさんが困惑していた時に、とつとつと「説教」をしてくれたの

がE先生であったそうだ。E先生は終戦後、アメリカの教会の招きで留学を果たし、博士号を取得して帰国した。そして、田舎の教会の牧師となり、併設の幼稚園の園長を兼ねた。少し離れたところにあるミッションスクールの教授となり、週2日出講していたが、その他の日はGさんが住んでいた家の近所の教会にいた。何かあるとGさんはまず、E先生に相談していたそうだ。A大学に進学が決まった時、他の誰も（自分すら）喜んでいない時、E先生だけが喜んでくれた。そして、祝福をしてくれたそうである。

## (3) 援助をうけて

GさんはT先生から「恩は恩師に返すものではなく、学生たちに返しなさい、それが立派な恩返しだ」と言われている。これはT先生がその恩師から言われてきたことだそうだ。彼はこのことを胸に秘めて、日々の仕事をしている。

## 文 献

- 穂山貞登（1962）創造の心理．誠信書房．
- 村田孝次（1987）教養の心理学（四訂版）．培風館．
- 杉原俊二（2005a）自分史分析の一考察（Ⅰ）—ナラティブアプローチへの手掛り—．吉備国際大学社会福祉学部研究紀要，10，81-90．
- 杉原俊二（2005b）自分史分析に関する一考察（Ⅱ）—生き方を変えるきっかけ—．吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要，6，49-58．
- 杉原俊二（2005c）対人援助とKJ法．人間科学研究，2，1-10．
- 杉原俊二（2005d）対人援助学と自分史分析．人間科学研究，2，11-20．
- 杉原俊二（2005e）自分史分析の研究（21）—Sさんの修士課程時代．人間科学，14，6-12．
- 杉原俊二（2005f）自分史分析の研究（22）—Sさんの短大講師時代．人間科学，15，6-12．
- 杉原俊二（2005g）自分史分析の研究（23）—Sさんの短大助教授時代．人間科学，16，6-12．
- 杉原俊二（2005h）自分史分析の研究（24）—Sさんの施設長時代．人間科学，17，6-12．
- 杉原俊二（2006a）自分史分析の一考察（Ⅲ）—自分に向き合うことと語り—．吉備国際大学社会福祉学部研究紀要，11，115-128．
- 杉原俊二（2006b）自分史分析の研究（25）—Sさんの大学時代（前篇）．人間科学，18，6-12．
- 杉原俊二（2006c）自分史分析の研究（26）—Sさんの大学時代（後編）．人間科学，19，6-12．
- 杉原俊二（2006d）自分史分析の研究（27）—Sさんの少年時代（前篇）．人間科学，20，6-12．
- 杉原俊二（2006e）自分史分析の研究（28）—Sさんの少年時代（後篇）．人間科学，21，6-12．

渡辺康磨（1990）セルフ・カウンセリング，ミネルヴァ書房（京都）。

渡辺康磨（1996）セルフ・カウンセリングの方法，日本実業出版社（東京）。